
黒に迷えば

彦星こかぎ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒に迷えば

【Nコード】

N4951R

【作者名】

彦星こかぎ

【あらすじ】

「問題は、それが可愛いかどうか」
老女と二人で住む少女は、ある日森の中で不思議な穴を見つける。
その先で少女を待っていたのは……
可愛いもの、綺麗なもの、そして醜いものが交錯する、どこか牧歌的でグロテスクな幻想物語。

森の中を歩いてみる。

足の下には腐葉土が何処までも続いていて、地面は優しく、柔らかい。大木は緑の葉を逆光に黒く染め、血液が流れているような滑らかで絶え間ない囁きを漏らす。陽光は揺れる葉の隙間から地面に辿りついて、凹凸の多い地面を更にまだら模様にしていく。

そして、目を閉じてみる。

突き刺さるような陽光は、閉じた目の中の世界を一瞬たりとも真っ黒にはさせず、瞼の裏で静かな燐光を点滅させる。髪を風が動かし、くぐもった森の香りが足を止めさせる。

目を開けると、今度こそ本当の暗黒が広がっていた。

* * *

したり顔をして老女は語りかける。

「つまり問題は、それが可愛いかどうか、なのさ」

少女は首をかしげた。

「そんなことないわ。可愛くないものなんて、たくさんあるじゃない」

「いいや、お前は物事を知らなさ過ぎるよ。本当に醜いものはそれだけで悪なんだ。

もつとも……」

老女は窓の外を見て、小さく息をつく。

「ここにいたら、醜いものなんて存在しないみたいに思えるけどね」
暗幕を開ければ広々とした夏の空が青く輝いているし、暗い部屋の中にも怖いものなんてありはしない。部屋に一つだけ明るさを与えているライトは、光線を真っ直ぐ前に伸ばしている。光の当たると

ころでは白い埃が舞うのがよく見えるし、埃の間をせわしく移動する小さな黒い生き物たちは、大きな目玉をあちこちに向けて楽しそうに動き回っている。何一つとして、少女に危害を加えたりはしない。

ライトの先では、かすかな音を立てながらゾートロープが回っていた。円盤の縁を取り囲むように少しずつ違う絵を描き、点滅するライトを当てながら円盤を回転させることで、絵が変わっていくように見せるという、老女の趣味の産物である。

魚が、大きな魚に食べられる。それだけの映像が、切れ目なく、絶え間なく、いつまでも続くのである。何処までも何処までも、魚は食べられ続ける。

「おばあちゃん、私ちよつと出かけてくる」

「あいよ、気をつけてお行き」

老女は大きな口を開けて豪快に笑った。

小さな家から踏み出すと、大きな森が顔を出す。

リュックに荷物を詰め込んで、スカート揺らして意気揚々、今日は何処まで出掛けていこう、今日も何かを見つけよう。

少女は小さく鼻歌を歌いながら、生き物だらけの森を進んでいった。

小枝の上にいる黄色い動物は、全身丸くて耳だけ突き出している。すれ違ったのは尻尾が三本の猫。木の洞に潜んでいるのは、部屋の中にいるのと同じ小さな黒い生き物たち。片目をくつつけて覗いてみると、慌てふためいて奥に逃げてしまった。

ふつと背後を、とても大きくて背の高いものが通り過ぎていった。振り返ってみても何もいなかったけれど、どこからか笑い声が聞こえてきた。

それから薄暗いところを進んだときには、半透明の影たちとたくさんすれ違った。なんとなく人の形に見えたけれど、日向に出ると消えてしまった。少女は何も気にしないで、ずんずん奥へと進んで

いった。

ふと気付くと、木に囲まれるようにして、崖の中腹に洞窟がある。苔に覆われて深い緑しかない場所の中で、その穴だけが真っ黒い。入ってみようよ。耳の傍で、白いふわふわした生き物が語りかける。二つの潤った瞳が、せわしく左右に動く。

ついてきてくれる？

いいよ。

じゃあ、行こうか。

少女は細い足を使って崖をよじ登り、洞窟の中に飛び込んだ。真っ暗な中を真っ直ぐ進む。同じ道を通れば帰れるから、何も心配することはない。遠くに見えていた光の点が、だんだん大きくなっていく。

そうして洞窟を転がり出た少女は、光り輝く芝生の上に落ちた。圧倒的な光が少女を包み込み、浮いているような錯覚を起こさせる。目をこすって起き上がり、改めて周囲を見る。さあ、次はどこに行こうか。

ところが少女は、凍りついたかのように立ちすくんだ。

目の前にいたのは、輝く目をした青年だったのだ。

彼は戸惑いながら少女に手を伸ばす。白いふわふわした生き物が驚いて少女の背後に飛び込むのを見て、彼はとても楽しそうに笑った。

少女は彼の手を取った。不意にむき出しのふくらはぎがむず痒くなっただけで、我慢して笑って見せた。

少女は家の外に出した椅子に座って、髪を切られている。

元々短かった髪を、端を切り落として整えるのである。少女の髪は赤茶けていて、とても綺麗とはいえないけれど、それでも元気の

いい髪をしていた。

老女は床屋を相手に絶え間なく世間話をしていて、さつきから何度も今日の太陽のことを口に出している。首周りに巻かれたビニールの上に、細い短い髪がばらばらと落ちてくる。

「ほらほら、そんなに肩に力を入れなくてもいいんだよ」

床屋のおじさんが優しく言ってくれる。しかし少女は、じっと口を引き結んだまま、少しも動くことが出来なかった。

カップに入った半透明の飲み物は、陽光を受けて細かく輝いている。口をつけながら少女は、青年の顔を伺ってみる。

青年は目を細めて笑った。少女も微笑してみせて、紅茶を口に入れる。不思議な香りが周囲を満たす。紅茶を飲んだことがないわけではないのに、ここの紅茶はなんだかいつもと違う味がした。

「今日は、あの白いのは一緒じゃないの？」

青年の問いかけに、

「あいっ……気まぐれ、だから」

少女は気取って答えた。青年は頬杖をついて芝生を眺めながら、紅茶を口に運ぶ。

「もし機会があったら、僕のアトリエを見せてあげるよ」

「本当？ ゾートロープはある？」

「へえ、あれが好きなんだ……じゃ、探しておこうかなあ」

「……ねえ、おばあちゃん」

暗幕を下ろした部屋の中で、少女は老女に話しかける。

「世の中には、可愛いものと醜いものしか、ないの？」

「そうだねえ」

老女はゾートロープを見つめながら、口を横向きに引っ張るようにして笑う。ゾートロープでは、活発そうな少年が鉄棒で前回りを

し続けている。

「そうじゃないものも、ないわけじゃないねえ」

「どういうもの？」

鉄棒から体を起こしたときに一瞬だけ見える少年の顔は、にやにや笑っていて横に広くて、とても可愛いとは思えない。

「綺麗なもの、があるね」

少女は一瞬、青年の長い睫毛を思い出していた。

「綺麗なものは、いいものなの？」

「そうとも言い切れないね。けども……」

老女はゾートロープを台から外した。急に差し込まれた老女の手に驚いて、黒い生き物たちが戸惑いながら逃げていく。少年はにやにや笑ったまま、永遠に静止する。

「お前は、とても可愛い子だよ」

「君はとても可愛い目をしているね」

青年のその言葉は、いわば免罪符なのである。

可愛い、といわれてしまうと、少女は隣に青年が座ることも、青年が少女の頬に触れることも許してしまうのである。

「可愛くなんかない、よ」

触れられるたびに感じる奇妙な気持ちの悪さと、同じだけの奇妙な嬉しさが、少女にはまだ耐えられなかった。

「うつん、君の目は本当に……」

耳元で囁かれる声が、また腰の辺りをぞくぞくさせる。

「そんな事ないよ。綺麗、じゃないし……」

白いふわふわした生き物が見当たらない。今日は一緒に来たはずなのに、今の少女の見えるところにはいてくれないのだ。

「アトリエに入るのか」

青年の言葉に、少女は自分でも気付かないうちに頷いていた。

アトリエの中は真っ暗で、点滅する光線だけが光の筋を伸ばしていた。ゾートロープが回っているの、少女は少しだけ嬉しくなる。円盤の中で、花が伸びては枯れていた。その茎の微妙なカーブは、今までに見たことがなかった。綺麗だ、と、少女は純粹に思う。

「気に入ったかい？」

青年がまた、目を細めて笑う。

「うん……」

少女は心の底から、素直にそういつてしまうことが出来る。

「次のを試してみようか」

暗幕の隙間から差し込む日光も、ライトのオレンジめいた光も、見慣れたものと何も変わらなかった。青年は背後から少女の肩を叩いて、もっと近寄るように促した。
ところが。

少女はライトの中で動くものに気付いた。

黒い小さな生き物だけれど、少女がよく見るものではない。大きな目をした可愛い生き物ではなくて……それは、後ろ半分が黒い膜に覆われた、目玉だったのだ。

「どうしたの？」

青年の問いに、少女は息を殺して問い返す。

「あれは、何？」

青年は少女の肩越しにそれを覗き込んで、また楽しそうに笑う。

「ああ、あれは目玉だよ」

「だけど……」

「あれは原始的な生き物だからね。生き物に一番大切なのは目玉だろう？」

「そう、かもしれないね」

「だから目玉は、ああやって一番はじめに進化するんだ。まだ体ができていないんだよ。目玉が大きい生き物なら、たくさん見ただろ

う？」

「うん……」

青年は平然と説明を終えて、少女の体に腕を回した。

「君の目は、本当に可愛いね……」

そのとき、少女は気付いてしまった。自分を背後から抱きしめて
いるものが、一体何なのか。

黒い毛だらけの体に、巨大な目玉が一つだけついた生き物。その
目は虚ろに上の方を見つめていて、口は半分開いて薄笑いを作っ
ている。

それが青年なのか、かつては青年だったのか、青年ではない何か
なのかはもはや問題ではない。ただそれは、未だかつて少女が見た
ことのないほどに、醜い生き物だった。

少女はその腕を振りほどいてアトリエを飛び出し、脇目も振ら
ずに逃げ去った。

それから、どうやって家に帰ったのか、少女は覚えていなかった。

* * *

目を開けてみる。

世界は黒く、瞼の裏の世界よりもずっと暗い。それでも、本当は
その世界には太陽が溢れ、森があり、そしてその世界での自分は単
なるありふれた人間という生き物であることを、それは知っている。
満足して、笑顔を作ってみた。

そしてそれは一つしかない瞳を開けたまま、毛だらけの太い足を
動かして、薄笑いを浮かべながら森を歩いていく。

いずれ、それは彼女と再会することになる。

どこまでも綺麗な瞳を持つ、かつて少女だったその女性に。

（後書き）

スタジオジブリが好きです。

強さを失わない少女たちは、果たして本当に、大人になるまで強く
いられるものなのでしょうか。

恋慕や愛情は、人間を強くするようで、弱くするようで。

大人になるって、怖い事ですよね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4951r/>

黒に迷えば

2011年3月9日19時25分発行